表１　兵士の身長分布（年代順）

年（連隊）	12 Zoll（188.2cm）	11 Zoll（185.6cm）	10 Zoll（183cm）	9 Zoll（180.4cm）	8 Zoll（177.8cm）	7 Zoll（175.2cm）	6 Zoll（172.6cm）	5 Zoll（170cm）	4 Zoll（167.4cm）	3 Zoll（164.8cm）	2 Zoll（162.2cm）	1 Zoll（159.6cm）	合計
1733（No.11）	2	19	57	171	253	369	351	38					1260
1733（No.14）	4	18	74	162	259	344	354	45					1260
1734（No.3）	36	108	258	472	635	302							1811
1744（No.27）	27	59	165	255	419	334	113						1372
1747（No.22）	14	57	93	252	394	319	111						1240
1756（No.19）	30	62	141	213	357	385	32						1220
1756（No.18）	21	69	178	284	391	427	110						1480
1762（No.19）	2	5	28	45	102	180	204	294	244	177	63	11	1355
1763（No.8）	2	3	23	38	72	127	248	202	292	223	157	65	1452
1764（No.18）	2	12	42	79	150	221	293	329	262	58			1448
1765（No.41）	2	8	30	40	153	213	276	219	179	77	13		1210
1771（No.5）	4	19	68	118	222	417	455	191					1494
1775（No.6）	12	26	90	267	247	138							780
1775（No.15）	19	65	222	581	440	214							1541
1776（No.8）	9	17	44	89	200	391	507	237					1494
1777（No.2）	5	15	32	125	304	499	532	78	10				1600
1777（No.35）	2	3	32	65	144	248	515	701	262				1972
1783（No.8）	10	14	56	84	220	423	540	269	122				1738
1792（No.3）	9	23	55	115	279	361	604	354					1800
1803（No.9）	5	6	26	72	122	230	372	476	341	167	55	1	1873
1805（No.3）	8	11	41	67	196	299	449	279	50	4			1400
1805（No.16）	5	13	28	97	258	573	689	393	42				2102

出典：Hanne, Körpergröße, S.43. 1792 年の第三連隊のデータをこれに追加した。

表２　第三連隊の兵士の身長分布

中　隊	国内徴集兵（Cantonisten）									外国人兵士（Ausländer）									合　計								
	12 Zoll（188.3cm）	11 Zoll（185.6cm）	10 Zoll（183.0cm）	9 Zoll（180.4cm）	8 Zoll（177.8cm）	7 Zoll（175.3cm）	6 Zoll（172.6cm）	5 Zoll（170.0cm）	計	12 Zoll（188.3cm）	11 Zoll（185.6cm）	10 Zoll（183.0cm）	9 Zoll（180.4cm）	8 Zoll（177.8cm）	7 Zoll（175.3cm）	6 Zoll（172.6cm）	5 Zoll（170.0cm）	計	12 Zoll（188.3cm）	11 Zoll（185.6cm）	10 Zoll（183.0cm）	9 Zoll（180.4cm）	8 Zoll（177.8cm）	7 Zoll（175.3cm）	6 Zoll（172.6cm）	5 Zoll（170.0cm）	計
⑨ボックム中隊					4	17	32	26	79				4	4	13	25	25	71				4	8	30	57	51	150
⑩ヴォイスキー中隊					5	15	33	29	82					5	14	30	19	68					10	29	63	48	150
⑪ネーフェ中隊				1	12	13	31	23	80				3	7	10	24	26	70				4	19	23	55	49	150
⑫グリースハイム中隊				1	6	10	32	32	81				2	6	10	32	19	69				3	12	20	64	51	150
擲弾兵大隊 合計				2	27	55	128	110	322				9	22	47	111	89	278				11	49	102	239	199	600
①近衛中隊	3	2	7	14	18	21	17		82	6	13	11	9	13	15	1		68	9	15	18	23	31	3 6	18		150
②マッソウ中隊		1	2	8	9	20	28	10	78		1	2	7	13	12	20	17	72		2	4	15	22	32	48	27	150
③シュレーゲル中隊		1	2	5	10	25	26	10	79		1	2	7	22	16	19	4	71		2	4	12	32	41	45	14	150
④フント中隊			4	4	19	13	29	12	81			3	5	12	18	22	9	69			7	9	31	31	51	21	150
第一マスケット兵大隊 合計	3	4	15	31	56	79	100	32	320	6	15	18	28	60	61	62	30	280	9	19	33	59	116	140	162	62	600
⑤ヴェデル中隊		1		6	17	14	31	10	79			5	7	16	12	21	10	71		1	5	13	33	26	52	20	150
⑥ヴェルンスドルフ中隊		1		5	15	17	29	9	76			4	8	9	16	29	8	74		1	4	13	24	33	58	17	150
⑦マンデルスロー中隊			4	3	15	11	25	23	81			4	5	12	19	19	10	69			8	8	27	30	44	33	150
⑧ハーゲン中隊		1	2	3	10	17	30	17	80		1	3	8	20	13	19	6	70		2	5	11	30	30	49	23	150
第二マスケット兵大隊 合計		3	6	17	57	59	115	59	316		1	16	28	57	60	88	34	284		4	22	45	114	119	203	93	600
合　計	3	7	21	50	140	193	343	201	958	6	16	34	65	139	168	261	153	842	9	23	55	115	279	361	604	354	1800

出典：StAH, HB B-18-1, S.119/120.

傾向を読み取ることができる。その一つは、長身者が①（近衛中隊）に集中しており、第三連隊の中でもひときわ長身の中隊になっていることである。一二インチ（＝六フィート）以上の兵士は連隊全体で九人おり、その全員が①の所属であるが、その一方で五インチの兵士はこの中隊にだけ一人もいないのである。なぜ近衛中隊に長身者が偏在したのか、それは連隊長の意向なのか国王の命令なのか、また偏在は戦術的理由によるのか、それとも武威の演出のためだったのか。当然これらの問いが生じるであろうが、残念ながら現時点の筆者はまだその答えを用意できていない。表から分かるもう一つの点は、マスケット兵の方が擲弾兵より軒並み長身者が多いことである。①を別にしたとしても、マスケット兵中隊には一一インチの兵士、一〇インチの兵士がいるが、擲弾兵中隊ではもっとも背の高い者でせいぜい九インチ台である。反対に背の低い者に注目すると、全体で三三・三％の擲弾兵が五インチの兵士で五六％を占めているのである。これらのことから、長身は擲弾兵に求められた第一の資質でなかったということになる。身長ではなく、優れた戦闘技術と経験がまずもって彼らに求められたと考えられよう。

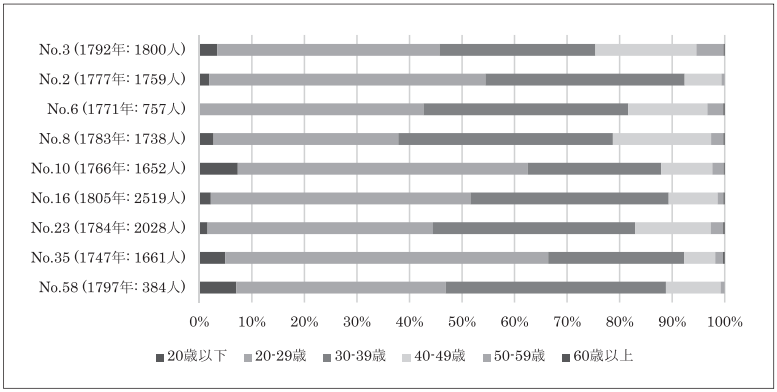
身長についてはさらにもう一つ、戦列との関連を指摘しておかねばならない。第三連隊の場合、例えば①の第一列の平均身長は一八五センチ、第二列一七五センチ、第三列一七九センチであり、連隊全体でも第一列一七八・七センチ、第二列一七一・九センチ、第三列一七四センチであった。つまりすべての中隊で、もっとも背の高い者が第一列に、その次が第三列、そしてもっとも背の低い者が第二列になるよう配置されていたのである。実は、このような配置は歩兵隊規定で定められており(34)。一七九二年の第三連隊もこの規定に従って編成されていたのであった。一七四二年以来、全軍で戦列を三列に統一したプロイセンにおいて(35)、最前列で膝撃ちする――と同時に、敵弾に当たる可能性がもっとも高い――第一列は、立射する第二列や第三列よりも長身で屈強な兵士を必要とした。連隊簿には、こうしたプロイセン軍の特徴がはっきりと現れていたのである。

［年齢と勤務年数］ 一七九二年の歩兵第三連隊では、兵士の平均年齢は三二・五歳であり、最年少の兵士は一七歳、最年長は六五歳であった。また彼らの平均勤務年数は一一・一年で、最長勤務者は四二年務めていた。年齢別に見ると、もっとも多いのはやはり二〇歳代の七六二人で、全体の四割以上（四二・三％）を占めるが、注目すべきは四〇歳代

以上の兵士の多さであろう。四〇歳代は三四六人（一九・二％）、五〇歳代は九三人（五・二％）と、全体の四分の一を数えるのである。この割合の高さは、他連隊と比較した時の第三連隊の特徴といえるかもしれない（**表3**）。平均年齢については、他連隊では一七七一年の第五連隊が三〇・九歳、一七八三年の第八連隊が三三歳であることが知られる(36)。第三連隊の一七九二年は七年戦争終結からすでに三十年経過した時点にあたり、その間のプロイセン軍には戦力の大きな損失がなかったことを考えると、三二・五歳という数値は特段に高くはないのかもしれない。

平均勤務年数についても同じことがいえる。他連隊では第五連隊（一七七一年）が八年で、第八連隊（一七八三年）が九年（国内徴集兵）、一〇年（外国徴集兵）であり(37)、これらと比べると、第三連隊の一一年は必ずしも例外的に長いといえないのである。ただし、この数値は先行研究の提示する四年や七年といった勤務年数と比べると(38)、かなりの長期ということになるが、この差を生じさせた原因は二点ほどあるように思われる。一つは前述のように、一七九〇年前後という時期がプロイセン軍にとって、戦力の大損失を経験せぬまま比較的長く平時が続いた時期にあたることである。そしてもう一つの要因は、一八世紀末のドイツで窮民化現象が顕著に進行していたことである。世紀半ばから始まった人口増加に農業生産は追いつかず、七年戦争後に窮民化はさらに加速した。「実質賃金は生存最

表3　兵士の年齢分布



出典：Hanne, Lebens- und Dienstalter, S.141. 1792年の第3連隊のデータをこれに追加した。

低限すれすれの水準にあり、それを下回る年も多かった」(39)。こうした状況下では、最低限の衣食住が保証された軍隊に身を置く兵士たちにとって、除隊するよりも軍に留まることの方が魅力的な選択肢だったと考えられるのである。

平均年齢および平均勤務年数については、これと関連する事柄を三つほど指摘することができる。一つは擲弾兵とマスケット兵による違いである。前者の方が、平均年齢・勤務年数ともに後者よりはっきり上回るのである。擲弾兵の平均年齢と平均勤務年数は三四・二歳と一一・八年であったのに対し、マスケット兵のそれは三一・六歳と一〇・四年であった。他連隊においてもこの点は同様である。第五連隊（一七七一年）では擲弾兵の平均年齢が三五歳である一方、マスケット兵は三〇歳であり、第九連隊（一七七五年）の場合も擲弾兵が三四歳、マスケット兵は二八歳であった(40)。擲弾兵の平均年齢が三七歳に達する連隊すらある（一七八四年の第二三連隊）(41)。以上のデータは、擲弾兵が経験豊かな精鋭兵であったことをよく示すものであろう。

第二の関連領域は、狙撃兵・補充兵といった兵士区分である。前述のように、狙撃兵は熟練者から選ばれた下士官候補ともいうべき兵士だったため、彼らの平均年齢は三六・九歳、平均勤務年数は一六・二年と、いずれも兵士全体の平均値をかなり上回っていたのである。逆に補充兵のそれは、三一・七歳、九・四年と全体値をいずれも下回った。平均で十年近く勤務しているとはいえ、補充兵はやはり、第三連隊の兵士全体の中では比較的練度の低い兵士だったのだろう。ともあれこれらの数値からは、熟練者と未熟練者を選り分け、下士官の供給源を確保しようとする軍の意図を読み取ることができよう。

平均年齢・勤務年数との関係性が強い第三の領域は、戦列である。三つの戦列の統計をとると、第一列が三三・四歳と一二・一年、第二列が三一・五歳と九・八年、第三列が三一・八歳と一〇・六年であった。平均年齢・勤務年数ともに、第一列がもっとも数値が高い。とりわけ第一列の平均勤務年数が、第三列よりも一・五年、第二列とは二年以上も長いことは注目されよう。前述のように、戦列ともっとも関係深いのは身長なのだが、たんにそれだけでなく、第一列は勤務年数の長い経験者が多数を占めてもいたのであり、要するに各隊の第一列は、最長身かつ最良の兵士で構成される仕組みだったのである。

［出身地］ 出身地の問題についてまず言及せねばならないのは、一七八七年の組織再編に際して、外国人の定数が決められたことである。改訂された規定によれば、中隊を基本構成する一六九人は、下士官、軍楽隊員、兵士の別を問わず、七六人が外国人で、九三人は同国人でなければならなかった(42)。連隊簿末の表を見ると、第三連隊もこの規定を忠実に守っており、すべての中隊で外国人は定数通りの七六人になっている。それゆえ第三連隊の構成比は、形式的には外国人四四・六％、同国人五五・四％であった。しかし、これはあくまでも表面上の数値にすぎない。というのも、実のところこの場合の「外国人」は国外の出身者だけを指すわけではなかったからである。この規定においては、同国人であっても、①外国人兵士を父親に持つ者、②ベルリンやブレスラウなどの兵役免除都市の出身で、手付金を受け取って入営した者、③財産がなく居住先も不定のカントン兵、は外国人として扱われた(43)。それゆえ名簿では、「外国人」と記述されているものの、プロイセン領内の出身者である者が相当数見受けられるのである。

一例として、グリースハイム大尉（Friedrich Wilhelm von Griesheim）が隊長を務める第一二中隊の事例を挙げてみよう。外国人については連隊簿に赤字で書き込むよう定められているので、該当者は一目瞭然である。この中隊の外国人の数は、前述のように規定通りの七六人であった(44)。彼らの中には、フランス（一人）やハンガリー（二人）といった明らかな外国出身者も見られるが、全体としてそうした者は少数である。むしろ多く見られるのは、ザクセン（七人）、バイエルン（七人）、プファルツ（三人）といった神聖ローマ帝国内部の他領邦である。そして、彼ら以外に、ザールクライス（六人）、マンスフェルト（三人）、ハルバーシュタット（三人）などのブランデンブルク＝プロイセン領内出身者が、一定数名を連ねているのである。ザールクライス（ハレとその周辺地域）とマンスフェルトは第三連隊の徴兵区（カントン）であり、前者の中には駐屯地ハレの出身者すら三人含まれている。このように、プロイセン軍の外国人兵士の中には「形式上の外国人」が一定の割合で存在したのであり、規定の数値のみを鵜呑みにしてはならないのである。

外国人（として記載された兵士）と同国人を比較すると、いくつかの点で目立った違いが生じている。第一に、平均年齢と勤務年数がかなり異なる。第一二中隊におけるそれぞれの数値は、外国人が三九・五歳、一五・二年である一

方、同国人は三二・八歳、一二・五年なのである。とりわけ平均年齢は、外国人が同国人より七歳近くも高いことが注目される。外国人の入営年齢の平均が二四・二歳、同国人のそれが二〇・二歳であることを合わせると、外国人の多くは経験豊かな職業兵、そして同国人の主体はカントン制度に基づく徴集兵といったイメージを想定してもよいかもしれない。第二の相違点は宗派の状況である。外国人七六人の宗派がルター派六一・八％、カトリック三〇・三％、改革派七・九％と、ルター派以外の割合の高さが目立つ。実際、中隊におけるカトリックと改革派はすべて外国人であった。他方、同国人九四人は全員ルター派であった。出身地と宗派は相互関連性をかなり持っているようである。また結婚については、グリースハイム中隊の外国人の七〇％（五二人）が既婚者である一方、同国人は四九％（四六人）であった。ここからも、外国人兵士は世帯を持った古参兵が多いというイメージを導けるかもしれない。

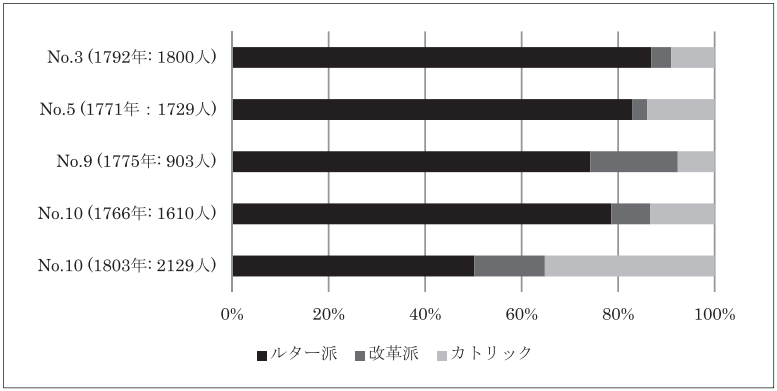
最後に、外国人・同国人の別は問わず、兵士一八〇〇人の出身地について情報をまとめておこう。もっとも多いのはやはりザールクライス二五・二％（四五三人）で、これにマンスフェルト二〇・九％（三七七人）、ハルバーシュタット九・七％（一七五人）、ヴェファーリンゲン（Weferlingen：マクデブルク市の西北：五一人）を加えると、地元ともいうべきこれらの自国領だけで半数以上に達する。帝国の他領邦でもっとも多いのはザクセン一〇・一％（一八一人）である。ザクセン選帝侯国の北西部は、第三連隊の管轄地域の三方を囲む形になり、距離的にはベルリンやポツダムよりはるかに近い隣接地域である。そして、もう一つの隣接国であるアンハルトからも六八人供給されている(45)。つまり、第三連隊の兵員調達は自己の徴兵区を基板としつつ、ザクセンやアンハルトといった近接他邦からの募兵で残りの多くを補っていたことが、この事実から浮かび上がるのである。

［宗派］ 第三連隊の兵士一八〇〇人の宗派割合は、ルター派が八六・八％とやはり圧倒的で、それ以外はカトリック九・〇％、改革派四・一％であった(46)。これは、第三連隊の駐屯するマクデブルク公国の宗派状況を反映したものと見てよいだろう。他連隊と比較するとこの特徴がより明らかである。マクデブルク公国に比べてルター派の割合の少ない西部に駐屯する連隊（第九および第一〇連隊）では、ルター派が八〇％に満たないのに対して、同じマクデブルク公国に駐屯する第五連隊の宗派割合は、第三連隊とほぼ同じである（**表4**）。

宗派については、前項で見たように、出身地との関連が顕著である。連隊簿における外国人が必ずしもプロイセン領外の者だけを指しているわけではないとはいえ、カトリックおよび改革派と記載された外国人は、例えばバイエルンやプファルツ、ベーメンなど、明らかな外国人ばかりである。連隊規模で見ても、カトリックと改革派の兵士はすべて外国人である。宗派との関連でもう一つ指摘すべきは、擲弾兵におけるカトリックの割合の高さである。擲弾兵大隊におけるカトリックの割合は一一・八％で、連隊平均の八・六％を上回っている。もっとも割合の高い第九中隊では一四％に達した。平均年齢と勤務年数の項でも示したように、擲弾兵が戦闘能力を第一の基準に選ばれていることはここからも明らかであろう(47)。

［戦歴］ この項目について連隊簿で分かるのは、(a)第一次・第二次シュレージエン戦争（オーストリア継承戦争：一七四〇～四五）、(b)七年戦争（一七五六～六三）、(c)バイエルン継承戦争（一七七八～七九）への従軍歴である。兵士一八〇〇人のうち各戦争に参加経験を持つ者は、(a)〇人、(b)二八人（一・六％）、(c)六三七人（三五・四％）であった。さすがに、半世紀も前になるオーストリア継承戦争の従軍経験者はいない(48)。バイエルン継承戦争と七年戦争の従軍経験者を中隊別に細分したものが**表5**であるが、ここでも擲弾兵は際立っている。バイエルン継承戦争経験者はマスケット兵中隊で軒並み四～五〇人であるのに対して、擲弾兵中隊では⑪を除いて七〇

表4　兵士の宗派



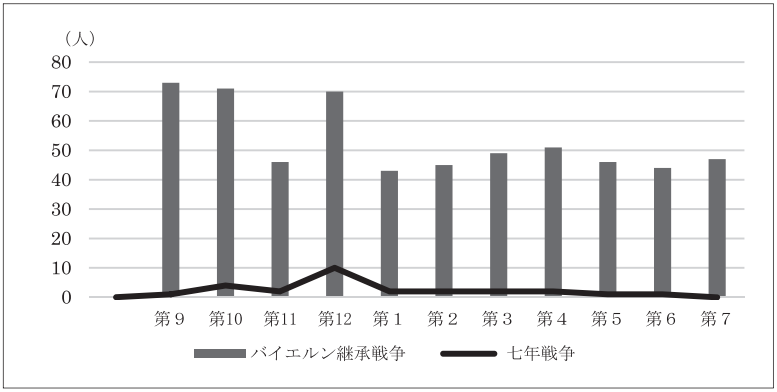
出典：第五連隊のデータは Hanne, Regimentsbuch, S.26. 第九、第一〇連隊は Kloosterhuis, Bauern..., S.225f. による。

人以上もいる。七年戦争の従軍経験者も、マスケット兵中隊ではすべて二人以下だが、擲弾兵中隊の⑫には一〇人もいる。再三指摘してきたように、この戦歴データも（だからこそ）、擲弾兵が実戦経験の多い精鋭兵であることを示すのである。

［生業］　連隊簿には生業（Profession）欄があるが、すべての兵士について記入されているわけではない。記入があるのは仕立屋や粉屋などの手工業職だけなので、未記入はやはり「職業訓練が不要な農業、日雇い、無職などを意味する」と考えられる(49)。第三連隊の兵士一八〇〇人のうち、生業が記入されていたのはちょうど六〇〇人、つまり三分の一であった。逆にいうと、兵士の半分以上は農村下層民ということになろう。六〇〇人の中でもっとも多かった職種は坑夫（七四人）で、次いで左官（六二人）、靴職人（五九人）、靴下製造工（五一人）、仕立屋（四八人）、亜麻布織工（四一人）、大工（三五人）であった。これらの職種を合わせると三七〇人となり、全体の六割を超える。

この生業という項目は、基本的に他のいずれの項目とも関連性がないが、ただ出身地との関係だけは若干の指摘ができそうである。その一つは、地元出身者の割合である。上記の職種のほとんどで、やはり地元のザールクライス出身者がもっとも多いのであるが、その割合が職種により異なるのである。靴職人と仕立屋ではザールクライス出身者の割合が一六・九％、一八・八％である一方、靴下製造

表５　従軍経験者数（中隊別）



出典：StAH, HB B-18-1.